
キャラメルマキアート

なかゆんきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャラメルマキアート

【Nコード】

N0575X

【作者名】

なかゆんきなこ

【あらすじ】

千鶴はいつ、自分に気付くだろう。コーヒー店のカウンター席に座る幼馴染・千鶴の隣に座った平助は声をかけるタイミングを失ったまま、キャラメルマキアートを飲み進める。心地よい雑音と、コーヒーの匂い。そして近くに居るのに遠く感じる、君。※薄桜鬼の現代パロで、平助↓千鶴風味のお話です。

（前書き）

薄桜鬼の現代（学園）パロです。平助↓千鶴なお話。

その姿に気付いたのは、偶然だった。

駅の構内にある、コーヒーカーフェ。その、通りに面したガラス越しに幼馴染の姿を見つけ、平助は思わず立ち止まる。

（…千鶴？）

平助の幼馴染、千鶴はガラスに面したカウンター席に座っていた。自分と同じく制服のまま。きっと、学校帰りに寄ったのだろう。どうせ帰り道は一緒なのだから、一緒に帰ろう。

平助はそう思って、店内に足を踏み入れた。

店内は、駅の構内にあるとあって様々な年齢層の客が訪れている。仕事帰り、もしくは途中のサラリーマンやOL。

大きなスーツケースを足元に置いた旅行者。

そして自分達と同じ、学校帰りの学生。

（…オレも何か飲んでくかな…）

注文カウンター上にあるメニュー表を見上げる平助。

今日は少し肌寒い日で、アイスよりはホットが飲みたい気分だ。

そして、甘い物が飲みたい。

「サイズはL、ホットで…」

先にそれだけを告げ、いくつかある候補の写真に指を這わせる。

新商品のこれにしようか。

いやでも外れだったら嫌だし…。と逡巡の末、

「…キャラメルマキアート…で」

結局、よく注文するメニューを選んだ。

いつもながら、キャラメルマキアートは注文するときに噛みそうになるので少しだけ緊張してしまう。

(前に総司と一緒に来た時に噛んで、えっらい笑われたからなあ…)
苦い思い出である。

でも、言いにくい名前でも好きなのだからしょうがない。

先に代金を払い、受け取り口に移動する。

店員が慣れた手付きでカップに注ぎ入れるのをぼうつと見つめて
いると、これまた慣れた手付きと笑顔で手渡された。

それを持ち、千鶴の座るカウンター席に向かう。

(…あ、本…読んでののか…)

よくよく見れば、千鶴は本を読んでいるようだった。テーブルに
は、飲み終わったらしいカップが置いたままになっている。

それなら邪魔するのは悪いかと思うが、間の悪いことに席は次々と埋まって行って、空いているのは千鶴の隣だけである。

話しかけたものか迷いながら静かに隣に座れば、集中しているらしい千鶴はこちらに気付かないようだった。

(……………とりあえず、飲むか…)

熱いカップを両手で持ち、フタにある小さな飲み口からずつと一口。

とたん、甘いキャラメルの芳香が口の中いっぱい広がる。

(…うん、甘い…)

結構甘い物が好きな平助は、それだけでまなじりが緩む。

ふうふうと息を吹きかけながら、ちよつとずつちよつとずつ飲んでいく甘いキャラメルマキアートは、平助の心身をほっこりと温めてくれた。

「……………」

キャラメルマキアートを飲み進めていく傍ら、平助はちらちらと横の千鶴を窺う。

店内の雑音は遠く、千鶴が本のページをめくる音だけがやたら近くに響く気がした。

(…なに読んでんだろ…)

本屋で掛けてもらったらしい紙製のブックカバーのせいで、千鶴

が何を読んでいるのかはわからない。が、漫画でないことは確かだ。自分じゃあるまいし、と平助は苦笑する。

(…にしても…)

千鶴はいつ、自分の存在に気付くだろう。

きつと驚くだろうな、と思うと、平助の口元が悪戯を思い付いた子供のようになやける。

(…千鶴が気付くまで、しばらく待ってみるか…)

そして平助は、もう一口キャラメルマキアートを飲んだ。

(…やばい…眠くなってきた…)

程よい雑音と、コーヒーの匂い。

それが心地良くて、自然、眠くなる。

ぼうつとガラス越しに構内を歩く人の流れを見つめていたから、尚更だ。

(…なにしてんだろ…オレ…)

目の前には知らない人達の群れと、飲み終わったキャラメルマキアートのカップ。

そして隣には、未だに自分に気付いていない幼馴染の女の子。

こんなに近くににいるのに、なんだか遠い。

こんなに近くににいるのに、なんだか寂しい。

(…やっぱ最初に声掛けるべきだったかも…)

でも今更、「よ、よう、千鶴」なんて声を掛けるのも白々しい気がする。

いっそ、このまま何事も無かったかのように帰ってしまおうか。平助がそう、思い始めた時だった。

「くちゅんっ…」

隣に座る千鶴が、小さなくしゃみをひとつ。

思わず隣を向く平助。

「あ……」

二人の視線がかち合う。

さすがの千鶴も、ここでもうやく隣の席に座っているのが幼馴染の平助だと気付いた。

その、白い頬が少しだけ赤く染まっているのは、公衆の面前で思わずくしゃみをしてしまった気恥ずかしさのせいだろうか。

千鶴はいつの間にか隣にいた幼馴染の姿に目を見開いた後、平助にもぼつちり今のくしゃみを聞かれたことを思い出し、

はにかむように、

困ったように、

微笑んだ。

「……………っ!!」

不意打ちにその微笑をくらった平助の体温が、一気に急上昇する。キャラメルマキアートを飲んでいた時の比でなく、頬が赤く染まっているのがわかった。

「平助君、いつからここにいたの？」

「すっ、すすすす少し前……」

「声、掛けてくれれば良かったのに……」

「いや……その……お前……集中してた……みたいだったし……。邪魔するの……悪いと思って……」

別に良かったのに、と千鶴は言う。

話題を逸らすように、赤い頬のまま、平助が千鶴の持つ本を指差した。

「そ、それ……面白いのか……？」

「うん、面白いよ。発売するの、ずーっと待っててね。待ちきれなくて、買ってすぐにここで読み始めたの」

「ふーん……」

そう言って読みかけの本を大事そうに見つめる千鶴は、本当に嬉しそうだ。

見れば、左側に残るページはあともう少しである。

「あ、ああああのさ！！　それ、最後まで読んでくんだろ？」

「うん」

「オレ、待ってるからさ。……一緒に帰らない……か……？」

「でも……」

待たせちゃうし、と渋る千鶴。

その視線の先には、飲み終わってペコリとへこんだキャラメルマキアートの空きカップ。

「だ、大丈夫だって！！　オレ、もう一杯飲みたいなーって思ってたところから。キャラメルマピツ……マキアート」

（ここで噛むなよオレ！！）

「ふふっ。平助君、キャラメルマキアート好きだよね」

千鶴とお茶する時も、よく頼むメニューだ。

でも今までは一度も、千鶴の前では噛まなかったのに。

チクショウ、と平助は心中で悔しがる。

（カッコ悪い……オレ……）

「私も、もう一杯飲もうかな……」

一杯だけでずいぶん居座っちゃったしと、笑う千鶴。

「お、おう！　あ、オレ奢るから！！」

「え、いいよそんな。悪いよ」

「いいからいいから！！」

結局平助に押し切られ、千鶴は席に荷物と読みかけの本を置いて、平助と揃って注文カウンターへ向かった。

平助はキャラメルマキアート。

千鶴は抹茶ラテ。

そして席に戻った千鶴は本を読み、平助はそんな千鶴と、ガラス越しの構内を見つめる。

二人の間には、会話は無かったけれど。

お茶を飲む音と、ページをめくる音だけが響く中で、
二杯目のキャラメルマキアートが少しだけ甘さを増したように思
えるのは、

気のせい、だったろうか。

(後書き)

キャラメルマキアート連呼してますが、何故キャラメルマキアートにしたかというと作者が一番好きだからです。そして噛みやすいメニユール名のを平助に頼ませたかったからです。ちなみにもう一つの候補はキャラメルフラペチーノ(笑)。

平助は片思いしてる時が一番輝いてると思う。そして甘い物好きだと可愛いと思うという妄想を形にしてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0575x/>

キャラメルマキアート

2011年9月26日03時04分発行